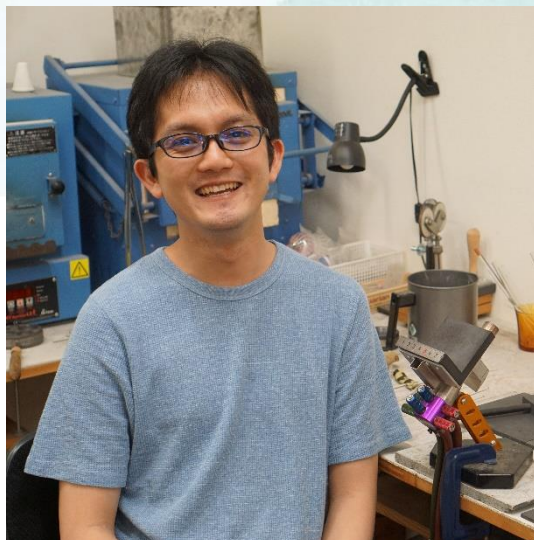


glass工房

新野恭平さん

工房にはたくさんの
作品があります。
ぜひ見に来てくださいね！



“酸素バーナー”で広がるガラスの世界

一般的にガラス細工に使われるバーナーの温度は700~800℃だ。しかし、ここで使用されている“酸素バーナー”は2000度にも達する。純度の高い酸素により高温の炎が出せる。熱でやわらかくなったガラスを自在に操っているのは、2013年に工房をオープンさせたオーナーの新野さん。ここではバーナーワーク教室も開かれており、40人程の生徒さんが通っている。



▲ 下のガラス棒に含まれている金が発熱することで、上のガラスに接着し、ピンクや黄、紫などに色が変わる。



▲ 金属に見える部分もガラス！

様々な希望に応えられるよう、日々新しいものを取り入れ、幅広い制作ができる環境を整えているそう。

酸素バーナーで扱うガラスには、温度差では割れにくいという性質がある。そのため、ガラスの部品同士を熱で接着させたり、ガラスを何層にも重ねることができ、複雑な作品づくりも可能だ。酸素バーナーと新野さんの技術で、ガラスの世界はどこまでも広がっていく。

2019年9月号

有限会社 旭進ガス器製作所

吉村健一さん

お客さんに喜んで
もらえることで、
やりがいと元気を
もらっています。

こなもん文化を支える
町工場の技と心意気



関西人のソウルフード「こなもん」。
たこ焼き、お好み焼きの数多くの有名店から信頼を集める有限会社旭進ガス器製作所。1915年創業。



▲ 既製品にはUの字が多いガス管。
吉村さんが作るコの字のガス管は、溶接
の数が多く手間も技術も必要だが、まん
べんなく熱が伝わる。

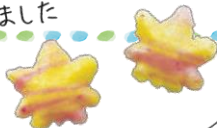
「都市ガスが高くて庶民は引けなかった時代、工事が不要でボンベにつなぐだけのプロパンガスが外国から入ってきました。扱いが簡単で火力も強い。そんなプロパンガス用の、たこ焼き、お好み焼きの調理機器を初めて作ったのが創業者である父なんです。」そう話す社長の吉村健一さん。
今では、たい焼きやベビーカステラなどの機器も手がける。

オーダーメイドの機器作りは、店の要望を聞くことから始まる。美味しく焼き上げるためのどんなに細かく難しい注文やこだわりにも、惜しまぬ工夫とアイデアで、求められるものを形にしている。

高橋製菓株式会社

高橋利明さん

うちのあられは遊び心が
たっぷり!直売もしています!
新作は紅葉(もみじ)あられ!
2色でマーブル模様挑戦
してみました



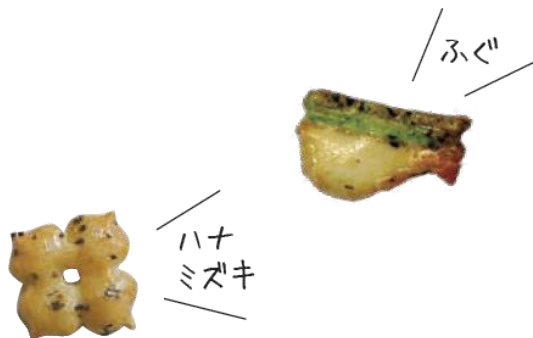
“見た目楽しく、食べて美味しい”
あられにこだわって



先代社長が、初めて食べたあられの美味しさに感動したのが高橋製菓株式会社の原点。昭和32年創業。現社長の利明さんは、父親の情熱を受け継ぎ、あられ一筋で今も変わらぬ味を守り続けている。“納得できる原料しか使わない”という父親のこだわりを守り、主原料のもち米はもちろん、具材や調味料に至るまで妥協はしない。また、「焼きたて」の美味しさを味わってほしいと、作りだめもしないとのこと。



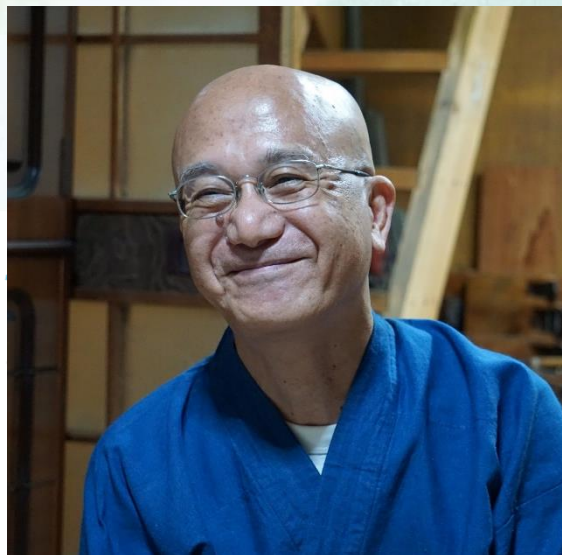
あられ界では珍しいツートンカラーやユニークな形のあられを開発するなど、遊び心が効いている。多くの人に美味しいあられを食べて幸せを感じてもらえるよう、新しい商品の開発は続く。



仏像彫刻師 山田 國行さん

趣味が仕事になったようなものの
ものづくりが好きやからね。
お客さんの予想以上のものを
届けるように掛けてます。

古仏の修復に打ち込んで52年



仏師であった父に18歳で弟子入りして以来、約1600体もの仏像修復を手掛けてきた山田さん。扱う仏像は江戸時代のものが中心だが、古いものでは藤原時代にさかのぼる。

長年で培った専門知識と経験により、仏像が制作された時代、技法、構造、素材を分析する。寄木造りの仏像は、ほこりを取り、お湯につけて膠を溶かし、木片へと解体する。虫食いや損傷部分を木材で再構築し、本来の姿へと彫刻していく。



▲ 観音菩薩像の修復
設計図なしに彫り進める



▲ 趣味で
製作中の
毘沙門天像

「自身の感性や考えを仏像に入れこまない」と話す山田さん。仏像と向かい経験を積むうちに、どのように修復すればよいか仏像が教えてくれ、自然に手が動くようになったという。

丹念に磨いた彫刻刀で、心を無にし、今日も仏像と向かい合う。